

学校経営のポイント

“夏休み直後”に必要な指導上の配慮

若井 彌一

7月下旬に始まった夏休みが、まもなく終わりを迎えようとしている。8月8日に開幕した第90回全国高校野球選手権記念大会は、8月18日に決勝戦があり、大阪桐蔭高校(北大阪代表)が常葉菊川高校(静岡県代表)に17対0で快勝し、終了した。数々のドラマティックな試合展開を見せている北京オリンピック(8月6日競技開始)も、24日には競技最終日を迎える。

“授業再開”迎える子どもの心境は

毎年のことながら、夏休みが終わり、授業再開(新学期開始と書かないのは、2学期制を採用している小・中学校等が相当数あることを考慮に入れていることによる)を迎えるころになると、よけいな心配とわかってはいても、全国の小・中学生等は、授業再開にうまく適応できるであろうかという不安が頭をかすめる。ほぼ1ヵ月、表だった動きがない(報道がない)ようであれば、全国的におおむね良好ということで、ひと安心できる。肝心なのは、1ヵ月間の子どもたちの様子である。

今年は、高校野球に加えて、連日、北京オリンピックの試合の様子がテレビ放送されてきたこともあり、子どもたちは毎日の刺激的な報道になれてしまい、刺激のない毎日に淋しい心境になっている可能性がある。

もっとも、授業再開というより、学校再開で友だちと再会できるのが心待ちの心境である子どもの場合は心配ないのかもしれないが、夏休み前と比べて、どことなく淋しそうであったり、元気が足りないとされる子どもが目についたら、それとなく気配りをするくらいのは欠かさないようにしたい。その気配りが、最悪の事態を防ぐ。

追いつめず、励ましを重視する

夏休み前に、子どもが被害者になってしまう事件と加害者になってしまう事件が続いた。

級友から「死ね」と言われて(書かれて)、死ぬ。また、教師から「死ね」と言われて死ぬ。もっと気丈夫に生きる力(精神力)を育てる教育に力を入れないといけないと思わせる事件が発生したかと思えば、一方では、成績が下がったことを父親に知られたくないので、知られる前に殺してしまったなどという事件が発生する。子どもの被害者可能性と加害者可能性の両面に目配りが必要なことを、あらためて印象づけた事件であった。

基本的方策は1つではなからうが、とくに強調しておきたいのは、子どもたちを「追いつめられた精神状態」にさせない指導上の配慮である。全国高校野球選手権大会やオリンピックで活躍している選手たちは、じつに輝かしい存在である。しかし、どの選手たちも、どのチームも、最初から全国レベル、世界レベルの実力を備えていたわけではない。

長期に及ぶ小さな努力の積み重ねが、これらの選手やチームの共通要素である。高校野球の決勝戦で圧勝した大阪桐蔭高校も、昨年は全国大会に出場できず、また、秋の地方大会でも苦い敗戦を経験している。この例からわかるように、大阪桐蔭高校の選手たちだけでなく、失敗を教訓として、工夫の伴った努力を継続する者は、誰もが他人を感動させる存在になる可能性を秘めていることを、子どもたちに気づかせたい。

そして、可能な努力を1つ1つ重ねていくことができるように励ましてやる段階的指導に努めたい。(わかい・やいち=上越教育大学大学院教授・附属図書館長)

●好評発売中! ●4月から実施「指導改善研修」、免許更新制導入等へ万全の対応を! 教育開発研究所

『教員の養成・免許・採用・研修』若井彌一編著 A5判 370頁 定価 3570円

■最新刊! 坂田仰/河内祥子/黒川雅子【共著】 B5判 224頁・定価 3,150円

『図解・表解 教育法規』